

ローマ日本人学校での経験

豊かな表現力と鋭い感性

イタリア、ローマ日本人学校で小学5年生から中学3年生までの国語の授業を担当したことがあります。各学年ごとの系統性がわかり、貴重な経験となりました。日本人学校の子どもたちと接していて強く感じたことは、平均滞在年数が3年未満であるにもかかわらず、子どもたちが明らかに変わっていくことです。

日本人学校に来た当初は、日本国内の子どもたちと変わりません。それが1年もしないうちに変わってくるのです。日本国内の子どもたちとの決定的な違いは表現力が豊かであること、感性が鋭いことです。

なぜそうなるのでしょうか。その要因を分析してみると、以下のことが挙げられます。

- 体験活動が豊富である。
- 少人数であるがゆえに授業の中で一人一人の個性が活かされる。
- あらゆる場面で一人一人の役割が保証され、活躍の場がある。

感受性・想像力・創造力

日本に帰国して、日頃接している中学生から感じたことは、感受性・想像力・創造力の乏しさです。本来ならば、それらが最も旺盛な年齢であるにもかかわらず、その源泉が枯渇しつつあるかのような生徒が多いことです。

一方、日本人学校の生徒が示す反応は、極めて対照的で、特に詩歌や小説の鑑賞、作文においては、実に豊かで瑞々しい反応や鋭い感性を見せてくれます。また、表現力が豊かです。

生徒がもつ潜在能力

日本人学校に来る生徒も、最初は日本国内の生徒と変わらないにもかかわらず、わずかな期間で変わってくるということは、日本国内でも工夫次第で生徒を変えることができるのではないのでしょうか。もともと生徒は、潜在的に豊かな表現力も鋭い感性も持ち合わせているのではないかと考えるに至りました。

今までは、指導者が授業の中で、生徒の潜在能力を引き出しきれていなかったのではないのでしょうか。あるいは、そういった場を保証してこなかったのではないのでしょうか。

ローマ日本人学校の文集から

ローマでの一年間

中学部一年

僕は、日本からこのローマに来て以来、いろいろと変わったこと、成長したことがたくさんある。

日本の小学校では、1クラス37人ぐらいた。その中で、自分がクラスで目立ったり、物事に積極的に挑戦しようと思ったことは、一度もなかったといえるかもしれない。音楽の授業で歌うときや、何か代表を決めるときだって、「こんなに人数がいれば、誰かがやってくれる」という気持ちが必ずあった。しかし、このローマ日本人学校に来てから、その気持ちは少し変わった。

ローマ日本人学校は、1クラスの人数も少ないし絶対自分が何かやらなくてはいけない場面、人前に出なければいけない場面が必ずあった。だから、ローマに来るにあたってとても不安な気持ちがあった。けれども、最初は「何でも楽そうなやつ」や「いちばん人数が多いところ」などを選んでいけばやっているといていた。しかし、そうはいかなかった。それが分かったのが「宿泊学習」だった。

初めてのイベントだったし、人数が多い係を選んだ。人数が多くても、やはり一人一人が活躍しなければならなかったし、みんなの前で何かしなければいけなかった。それを乗り越えられた。宿泊学習があったから、積極的になれたと思う。

積極的になれたのが実際に分かったのが、大きな行事ではなく、国語の授業の「ディベート」だった。1回目はみんながすごすぎて発言できなかった。結果は自分のチームが勝ったが、あまり喜ばなかった。2回目は、勝ちたいというよりも「発言したい」という気持ちがかかなり強かった。だから発言できた。

やはり、僕は日本にいるときと何かが変わったと思う。何かとはしっかりととはわからないが、自分は成長した気がする。あのまま日本にいてよかったと思うし、本当にローマに来ることができてよかった。